

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02796

研究課題名（和文）能動的な姿勢を促す参加体験型音楽鑑賞学習に関する研究 ジュネーヴの教育からの示唆

研究課題名（英文）Participatory Experiential Music Appreciation Learning That Promotes an Active Attitude:A Suggestion from Music Education of Geneva

研究代表者

今 由佳里（KON, Yukari）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：40440838

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：能動的な姿勢を促す参加体験型音楽鑑賞学習に関して、先駆的な実践がなされているジュネーヴ州公立小学校の取り組みからその特徴を抽出し、日本における適用の可能性について検討した。スイスにおける参加体験型音楽鑑賞学習最大の特徴は、ピアジェの構成主義理論に則った教育がなされている点にある。スイスに生まれ、ジュネーヴ大学教授であったピアジェの教育アプローチの影響は、ジュネーヴの学校教育全般にもたらされていることはこの地では周知されている。本研究では、ピアジェのこの手法を援用して、日本の伝統音楽「雅楽」の鑑賞教材を作成し、その教育的効果について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

平成29年告示『学習指導要領』改訂ポイントのひとつに「主体的・対話的で深い学び」が提示されている。本研究では、この日本の求めに応えるためジュネーヴ州公立小学校で実践されている参加体験型の音楽鑑賞授業を取りあげて考察を行った。スイスにおけるこの学びは、活動から知識を構成していくピアジェの構成主義理論に則っており、先駆的な能動的音楽鑑賞学習実践例として捉えられる。本課題では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた鑑賞授業の一例として、ピアジェのこの教育理論に沿った音楽鑑賞教材を作成、「主体的・対話的で深い学び」が実現できる参加体験型音楽鑑賞学習について提案した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the pioneering practices of public elementary schools in Geneva to extract the characteristics of participatory experiential music appreciation learning that promote an active attitude, and examines the possibility of its application in Japan. The most significant feature of participatory experiential music appreciation learning in Switzerland is that such education is based on Piaget's constructivist theory. As Piaget was born in Switzerland and served as a professor at the University of Geneva, his educational approach has broadly influenced school education in Geneva as a whole. In the present study, we applied Piaget's method to create educational materials for the appreciation of traditional Japanese music, "Gagaku," and elucidated their educational effects.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽鑑賞 参加体験型 スイス ピアジェ 構成主義

1. 研究開始当初の背景

平成29年告示『学習指導要領』改訂ポイントのひとつに、「主体的・対話的で深い学び」が提示されている。研究代表者は、これまでスイスの公立小学校における授業実践を視察し、この地で実践されている参加体験型の鑑賞学習のあり方から児童が主体的・対話的に学習へ向かう姿勢を強く感じてきた。そしてその学びが児童に定着し、音楽に生涯親しみを持つ子どもを育てている教育環境にも気づかされた。このような経緯から、スイスにおけるこの取組みは、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」という日本の求めに応えられると同時に、教育現場の音楽教師が長年抱える受け身的な鑑賞学習という課題を解消することに繋がるのではないかと考えたのが本研究に着手した背景である。

2. 研究の目的

本研究では、参加体験型の音楽鑑賞学習がなされているジュネーヴ州公立小学校における事例から、能動的な姿勢を促す鑑賞学習のあり方について考察し、日本の音楽教育へ示唆をもたらすことを目的としている。

音楽鑑賞の授業は、子どもたちが受け身になりがちであり、主体的で活発な学習活動に発展させることは難しいという音楽教師の声について、これまで研究代表者は度々取り上げてきた。本研究では、この課題解決のために体験を取り入れた音楽鑑賞学習が平常の授業において実施されているスイス・ジュネーヴ州公立小学校における実践から、能動的な姿勢を促す鑑賞学習のあり方を明らかにし、日本の音楽鑑賞教育へとその成果を還元するものである。

3. 研究の方法

本研究は、ジュネーヴにおいて行われている参加体験型の音楽鑑賞学習について、現地小学校における授業を視察し、その授業内容の分析を通して能動的な姿勢を促す鑑賞学習の特徴を明らかにするものであった。そのため、研究初年度である令和2年度からスイス調査を実施する予定であったが、COVID-19の影響で海外渡航は数年にわたり自粛せざるを得ず、そのためこれまで収集した資料(研究代表者として、平成28年度～令和元年度に採択された研究課題16K04775において収集)を再検討して研究を進めざるを得なかった状況がある。本研究では、現地から新たに入手した資料とともに、これまで収集したスイスにおける授業記録や教材を改めて分析・考察し、能動的な参加体験型音楽鑑賞の特徴を抽出、教材を作成してその有効性について検討した。またそれに先立ち、予備的調査として日本における参加体験型の実践についても検討を行った。

4. 研究成果

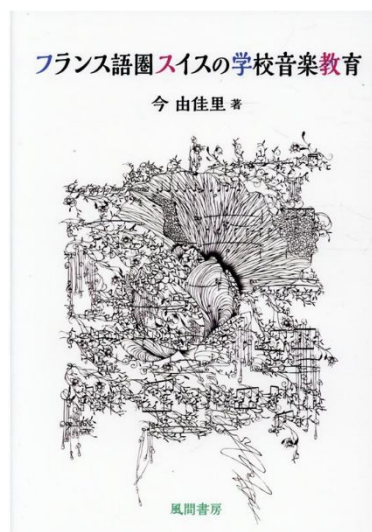
研究成果は、以下3点にまとめられる。

- (1) 参加体験型音楽学習におけるピアジェとダルクローズの教育理論の影響
- (2) 幼児期における体験的音楽活動の諸相
- (3) 日本の伝統音楽「雅楽」のICT鑑賞教材作成とその検討

(1) 参加体験型音楽学習におけるピアジェとダルクローズの教育理論の影響

ジュネーヴ州の音楽教育最大の特徴は、ダルクローズ(Emile Jaques-Dalcroze, 1865-1950)のリトミックを中心とした学校音楽教育と言えるが、心理学者ピアジェ(Jean Piaget, 1896-1980)の影響は、ジュネーヴの学校教育全般に長年色濃くもたらされていることはこの地では周知されている。スイスで生まれ、ジュネーヴ大学教授であったピアジェの教育的アプローチの影響は、ジュネーヴ州の学校教育全般に強くもたらされており、ジュネーヴ州公教育課では、初等教育においてピアジェの構成主義に重きを置いた教育アプローチを推奨すると明示している。ジュネーヴで実施されている音楽鑑賞授業は、学習対象について子ども達が体験的・能動的に学びを深めつつ、知識を構成していくピアジェの影響が顕著に認められる事例と言える。この教育法は、子どもたちの音楽鑑賞力の育成に繋がっており、子ども達の「音楽的な耳」を育てることに貢献している。授業の内容を見ると、音楽に限らず、身体の動きや絵画、グラフィック、写真、演劇、詩、ダンスなど芸術分野の様々な側面からアプローチし、活動から知識を構成していく過程が認められる。このような試みは、受け身的な鑑賞学習が課題と言われる日本の学校音楽教育にも示唆をもたらすものと言える。なお、本項に関する研究成果は、令和3年度科学研究費助成事業(研究成果公開促進費(学術図書))を受けて拙著『フランス語圏スイスの学校音楽教育』として刊行した。

【写真1 拙著『フランス語圏スイスの学校音楽教育』】



(2) 幼児期における体験的音楽活動の諸相

本研究は、スイスの公立小学校において授業を視察し、能動的な鑑賞学習に関する調査を研究の第一段階で実施する予定であったが、研究初年度より COVID-19 の影響により海外渡航を数年にわたり断念せざるをえない状況であった。そのため、研究初年度は予備調査として日本における参加体験型音楽鑑賞学習の実態を確認することとし、とりわけ幼児期を対象にして二側面から研究を進めた。

一点目は、身体の動きを伴った音楽聴取について、日本の幼稚園において多く取り入れられている「さくら・さくらんぼのリズム遊び」の事例から検討した。「さくら・さくらんぼのリズムあそび」は、埼玉県深谷市のさくら・さくらんぼ保育園の創設者である斎藤公子(1920-2009)が考案した教育法である。これは、現在日本の多くの幼稚園で導入されており、幼児教育に携わる教育者には周知されているメソッドのひとつである。子どもの発達の可能性が抑えられることを危惧した斎藤は、とりわけ手指、足先の感覚を活用した指導法を考案している。身体の動きを伴った音楽活動については、数多くの音楽教育家が研究を進めている。ダルクローズのリトミックは、身体の動きと音楽が融合することによって自由な音楽表現へと導かれることに特徴があるが、彼のこのメソッドとは異なる視点・ねらいを持つ「さくら・さくらんぼのリズムあそび」は、動きが決められているからこそ、表現に抵抗がある子どもでも自信をもって生き生きと体を動かして楽しむことができるという効果が認められる。また、このような経験は、自分で表現できるという自信に繋がる場合もあるのではないかという見解も導きだされた。身体の動きを活用するということは、音楽の理論的な面についても、無意識のうちに感覚的に体得する有効な手段となっている。一方二点目は、幼児の手遊び歌に着目して研究を進めた。一般的に手遊び歌は、表現の領域に属する活動であるが、幼稚園における幼児の姿を観察すると、自らが歌を歌うだけでなく、保育者の歌を聴きながら手遊びをする姿が往々にして見られる。歌を歌うという活動がなくとも、子どもたちは保育者の歌を聴きながら能動的に手を動かすことにより、音楽をより深く感じる機会になっていることが示唆された。

(3) 日本の伝統音楽「雅楽」の ICT 鑑賞教材作成とその検討

参加体験型音楽学習の一例として、日本の伝統音楽である「雅楽」の教材を作成し、能動的な音楽学習について検討した。雅楽は、小学校や中学校、高等学校の音楽教科書に掲載されているが、現代の子どもたちには馴染みのない音楽のためか、教師からは鑑賞授業において扱いにくい楽曲のひとつとして挙げられがちである。作成した教材では、雅楽で用いられる楽器を「吹物」「弾物」「打物」に分類して各楽器に2次元コードを付し、楽器についての解説を音付きでまとめ、手軽に何度でも楽器の音が聴けるように工夫した。これは、楽器の名前と音を一致させて覚える手立てとなるとともに、子どもたち自身が手軽に何度でも聞き返せるため楽器入門としての側面も期待できる。また、鉦鼓・鞆鼓・太鼓の「打物」の演奏体験ができる二次元コードを付し、自分自身が演奏に参加しているような疑似体験ができるように工夫した。さらに雅楽の背景を学ぶために、教材には「雅楽の成り立ち」や「舞台について」「太鼓について」の内容も加え、総合的に雅楽について学びを深められるように構成している。

GIGA スクール構想により、近年は児童一人一台端末が普及して教育環境が充実した。そのため、子どもたちはタブレット端末などを用いて2次元コードを読み取り、自分のペースで音を確認しながら鑑賞学習を進められるようになった。音楽科における ICT 教育の効果が高いことは既に周知されているが、とりわけ鑑賞の授業においては、従来と比べて子どもたちの楽曲鑑賞後の感想が「質的にも量的にも大きく変化」していると言う現場教師の声からも、その有効性が理解できる。



【写真2 研究代表者が作成した参加体験型音楽鑑賞教材の一部】

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yukari KON	4. 巻 1
2. 論文標題 Study on the Effective Use of Picture Books that Make Sound in Music Learning	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 APSMER 2023 Seoul: Music in the Life, Life in the Music, The 14th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 今由佳里	4. 巻 特別号
2. 論文標題 幼児期における身体の動きを伴った音楽活動に関する一考察：「さくら・さくらんぼのリズムあそび」の実践に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要.	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今由佳里	4. 巻 7
2. 論文標題 鹿児島高等農林学校における田之神舞の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今由佳里、尾辻 菜摘子	4. 巻 72
2. 論文標題 幼稚園における手遊び歌に関する実践的研究：「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」領域との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）	6. 最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 今由佳里
2. 発表標題 薩摩の「田の神」にまつわる民俗芸能 ー鈴掛馬踊り・田の神舞・お田歌をめぐるー
3. 学会等名 始良市歴史民俗資料館「ふるさと歴史講座」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yukari KON
2. 発表標題 Study on the Effective Use of Picture Books That Make Sound in Music Learning
3. 学会等名 The 14th Asia Pacific Symposium for Music Education Research (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 今 由佳里	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 145
3. 書名 フランス語圏スイスの学校音楽教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------